



# アナログゲーム



山本マト

眼前は白い霧に覆われている。

建物や人がゆらゆらと揺れる。暑さは感じないのに、まるで陽炎をみているかのように視界が歪む。

道端に咲いた、まだ成長途中の向日葵。ジリジリと五月蠅い蝉の鳴き声。それらが今が夏だと教えてくれる。

目を凝らすと、子どもの頃に見た田園風景があった。子供が三人、単線の道路の端を並んで歩いている。

男の子がふたり、女の子がひとり。男の子のひとりが女の子のスカートを捲る。完全に翻る前に、男の子は走り去る。

「————ッ！」

女の子はその場に屈みこむ。頬を染めて、もうひとりの男の子を見上げる。目にはうっすらと涙を浮かべている。

「しょうがねえな」

あさっての方向を見ながら女の子に手をさし出す。空いたほうの手で後頭部をボリボリと搔く。

手を掴み、女の子は立ち上がる。俯いたまま、まったく動かない。口を固く閉じ、目は前髪で隠れて見えない。

男の子は手を差し出してからずっと後頭部を搔いている。

ふたりとも手を繋いだまま。

「ずっとこうしていたいね」

女の子は顔をあげる。うっすらと瞳が潤んでいる。

「ずっとスカート捲られていたいの？」

「ちがうもん」

頬を膨らませ、恥じらいからか紅潮している。

「行こうぜ」

そう言って歩き始める。手を繋いだままのため、女の子が引っ張られる。男の子は歩幅を小さくし、しばらくしてふたりの歩調が一致する。

「ねえ、わたしが言ったこと、ホントにわかってる？」

「どうだろうな」

そう言って繋いでいた手を離す。スカートを捲った男の子を追いかけるように、走って行ってしまふ。

ひとり残された女の子は一瞬顔を落とす。しかし、すぐに男の子の後ろ姿を追いかけ始めた。陽炎のように見えていた視界が瞬時に夥しい量の光に浸食される。かと思えば暗転し、何も見えなくなった。

あまりの寝苦しさに目が覚める。

白い天井。中学生のときに新調した勉強机。マンガと高校一年生の教科書が入っている本棚。デジタル放送に移行してから映らなくなったブラウン管テレビ。それらが八畳間の僕の部屋に収まる。

いつもと同じ朝。けれども、ほんの少しだけ心が踊り、気が大きくなる。

明日からは夏休みで、非日常が待っているような気にさせてくれる。

目覚めがいいのはノンレム睡眠のせいだけではないと思う。子どもの頃の夢。一緒に遊んだ友達。なんだか懐かしい夢を見ていた。

ベッドから体を起こす。そこで初めてパジャマが汗で濡れていることに気がついた。体に張り付いたシャツが気持ち悪い。

一学期最後の登校日に、汗臭いのはいかなものだろう。クラスの女の子からのあだ名が「アセ」とか「ニジミ」なんてつけられるのは堪らなくいやだ。童貞はそういうところには気を使う。

朝ごはん前にシャワーを浴びることにした。

シャワーを浴び、朝ごはんを食べて部屋に戻る。すると、ゲームにしか使えないテレビの電源が入っていた。画面は砂嵐で埋め尽くされている。誰かが部屋に入って電源を入れたとは考えられない。

古いテレビだし、こういうこともあるのかもしれない。

電源を切ろうとした時、なんとなく画面を注視する。

砂嵐のなかにうっすらと見えたような気がした。ただの砂嵐なのに、たくさんの写真をコラージュして作った絵画のようだった。

なんだか瞬きする。

今度は違う絵が映っているように見えた。

「空、学校遅れるよ」

階下から母さんが叫ぶ。

思考が学校へとシフトする。部屋の掛け時計をみると、八時十五分だった。朝のホームルームは八時三十分。家から学校まで歩いて二十分ほどかかる。走ればギリギリ間に合う時間だった。

家を出て、走って学校へ行く。途中、絵のことを考える。

砂嵐の絵がどこなのか、本当のところはわからない。でも、心当たりはあった。それほど前のことではないけれど、懐かしい思い出。こっちに引っ越してきてからは決してしなかった遊び。一緒にいた友達。

考えながら走っていると、あっという間に学校に着いた。HR開始三分前だった。

「気持ちわるい」

親友未満で友達の進藤拓也に今朝起こった砂嵐の話をした。気持ち悪いとは砂嵐についてだと思いたい。この話をした僕に対してでなければ問題ない。

クラスの男子でただひとり、シャツをズボンから出している。先生に怒られては直し、先輩に睨まれては直す。それでいてすぐにシャツを出す。理由は大したことはなかったので、もう忘

れた。

「でも、そういうことない？ テレビに限ったことだけじゃなくて。目を瞑ると意図していないのに昔見た光景が思い浮かぶってこと」

「ねえよ」

進藤は眉間にしわを寄せて、心底嫌そうに言った。

はっきり言われるとなんだか心に刺さる。進藤のことが三パーセントくらい嫌いになった。

「確かに気持ち悪いわね。あたしだったらそんなテレビさっさと捨てるけどな」

会話に参戦してきたのは同じクラスメイトの大見絵里だった。

空いた窓から夏の風が入り込み、僕たちの体に纏わりつく。絵里のセミロングの髪が短く揺れる。

その様子を見ていたら、獰猛な顔つきで睨まれた。女の子コワイ。

このふたりとは高校に入学して知り合った。席替えで僕を含めて三人とも一番後ろの席になった。横に五列ある中で、一番左の窓よりの席が進藤。その隣が僕で、右には絵里がいる。

一番最初に話しかけたのは絵里で、用件は「金貸して」だった。会話のきっかけが欲しかったからだと思いたい。貸した五百円は未だに返してもらってないけど。

進藤と話すようになったきっかけは覚えてない。気がつけば話すようになっていた気がする。男同士なんてそんなものだと思う。

「で、オチはあるんでしょうね？」

「小さい頃、見たことあるようなところだった」

「それだけなの？」

「それだけ」

絵里がため息をつく。

「つまらないオトコ」

ごめんなさい。

一学期最終日は終了式のみで、午前中で授業は終わる。体育館で全校生徒が校長先生のありがたいお話を聞く。蝉が立ち替わり違う音色を奏で終わり、ようやく終わる。その間に二人の生徒が意識を失い、教師の手により保健室に運ばれていった。クワバラ、クワバラ。

教室に戻り、帰宅の準備をする。クラスメイトは長期の休みを明日にひかえて、どこかソワソワしている。

机の中に溜まりにたまったプリントを手で圧縮して鞆に詰め込む。パンパンに膨らんだ鞆を手で教室をでる。何も言っていないのに進藤と絵里がついてくる。

学校を出て三人で帰路につく。会話は無い。

拷問の無言。最初はそう思っていた。慣れてくると苦ではなくなったから、人間は意外と適応力がある生き物なのかもしれない。

進藤とは途中で別れる。「じゃあな」とか「また新学期に」なんて言葉もない。一緒に帰っているのがむしろ不思議なくらいだ。休みの間、遊ぶ予定もない。どうして一緒に帰っているのだろう。

進藤と別れても、絵里との会話は無い。

「明日の十時、駅でいいかしら」と、不意に話が始まった。

デートのお誘いかな。

「映画でも行こうか」

絵里が好きなものを僕はひとつだけ知っている。それは映画だ。黒澤明が好きだという話を聞いたことがある。なんでも『生きる』という作品の葬式シーンにえらく感動したそう。

僕は実際にみたことはないけれど、長々と続く葬式のシーンが堪らなく好きらしい。黒澤はわたしの嫁、と言っていた。旦那だろうと思ったが、心の中に閉まっておいた記憶がある。

「空がテレビで見たっていうところ、映画館はある？」

映画が観たいのか、それともテレビの風景が気になるのだろうか。後者はないと思うけど、一応聞いてみることにした。

「大きい映画館はないけど、個人でやっている小さな映画館はあったと思うよ。なにしろ田舎だからね」

「じゃあ、そこでいいわ」

T字路にさしかかり、絵里とはここで別れた。進藤と同じく、あいさつなんてなく、あっさりしたものだった。

急に田舎に行くことになった。

小学生になった時、こちら引っ越してきた。最初は田んぼがないことにまず驚いた。むこうはマンションなんてなくて、一番高い建物が学校だった。それよりも高いものといえば、山しかない。THE田舎。

当時、一緒に遊んでいた友達のことが頭に浮かんだ。あの時も今とは面子は違うけれど、三人でいつも遊んでいた。少し懐かしくなった。会ってみたいとも思った。

そんなことを考えているうちに家に着いた。

さっそく明日の準備に取り掛かろうと思ったけれど、あえて持ってくるような物はないことに気がついた。なので母さんにお金をせびることにした。

翌日、九時五十分に駅に着いた。

無駄にキラキラと照りつける太陽。再生可能エネルギーを求める世界に報いようとしているのか、少しだけ同情する。

駅の人足は疎らで、サラリーマンがハンカチ片手に往来しているくらいだった。これなら絵里が来たらすぐにわかる。

そう思って待ってみるものの、十時をすぎても絵里の姿は一向にみえなかった。もしかすると昨日の約束は冗談で、後にからかうためのネタ作りの線も否めない。

そんなことを考えていると、人の影からひょっこりと現れた。

「空……。キミは今来たところだろう？」

遅れたことを認めたくないのか。

「三十秒前にな」

絵里は白い歯をみせて不敵に笑う。

そんな笑顔も新鮮で良かったけれど、休みにふたりで会っていることのほうが青春っぽくてなんだか照れた。

そこで思い出した。ひとり忘れていることに。

「絵里さん、ひとついいでしょうか」

絵里は掌で紫外線を避ける。

「なんだい少年」

「進藤拓也がいないのですが……」

「ああ、あいつは出家したから来れないそうだ」

出家なら仕方がない。悟りを開く者を誘うのは野暮というものだろう。

でも、これで二人旅が決定した。夜の事を考えると、顔が赤くなるのが自分でもハッキリとわかった。

「空、お前帰ってもいいけど、どうする？」

ごめんなさい。でも、どうしてわかったのだろうか。涎でもでていたのかな。一生童貞で歳を重ね、賢者と呼ばれるのもいいかと思った。

ふたりで電車に乗る。片道四時間の小旅行気分。

電車の中で絵里にお菓子もらった。「はい、エサ」と渡されたが、悪い気はしなかった。

相変わらず大した会話は無いけれど、これはこれで楽しい。

田舎に着いた頃には正午を回り、太陽が一番高い位置に昇っていた。

駅を出た時には涼しく感じたのに、今はもう汗が止まらない。

久しぶりに帰ってきた田舎は記憶のものとは少し違っていた。相変わらずマクドやスタバはなかったけれど、模倣有名ファーストフードができていた。ウィンドウ越しに中をみると、都会にある店舗に比べて格段に広がった。その割に人は入っていない。

「空、入るの？」

そう聞いてきたが、絵里は返事を待たず中に入って行く。最初から聞かなければいいのに。適当に開いた席に腰掛ける。

僕はコーラで絵里はアイステイーを飲みながら外の様子を眺める。

以前と変わったところもあるけれど、記憶に一致する店もいくつかあった。仲の良かった友達と一緒にプラモデルを買ったおもちゃ屋。よくお菓子を食べた小池商店はコンビニになっていた。少し寂しくなった。

「田舎にもコンビニはあるのね」

「最近できたんじゃないかな。子供のころはなかったから」

「ここはもう田舎じゃないわ。言ってみれば半田舎ね」

確かにそうかもしれない。僕の田舎のイメージの中にも、ファーストフード店やコンビニは存在しない。

でも、ここに住む人は変わっていないと思う。どんなに町の形が変わっていても、住む人はずっと「ここは田舎」だと言い続けるのかもしれない。

向かいの席に男女が座る。制服を着ていた。引っ越さなければ僕もあの制服を着ていたのかもしれない。

ちょっと想像してみる。

チェックのスカートにシャツの胸元には赤いリボン。少しだけ着崩した女子用制服姿の自分は、思いのほかイケている気がした。

「顔が歪んでる。歯並びが悪い。ニキビを潰した後が丸わかり。それに脳内シュミレーションが加わったとなると、いよいよ救いようがないわね」

脳内シュミレーションの他は全部ウソだ。口の悪さは縫うだけでは止まらないかもしれない。溶接するか、声帯機能をどこかに移植するまで治らないだろう。

向かいの席の男子生徒と目が合った。小太りでクリッとした目。デブ専にはモテそう。一緒にいるのが男子生徒の彼女だと思えば実に恨めしい。ドリンクバーで全種類の飲み物を混ぜた液体を飲ませてやりたい。

「せら……世良空か？」

男子生徒はじっと僕を見る。

小さい頃に住んでいたから、知り合いがいても不思議はない。

僕もこの男子生徒のことを思い出そうとすると、見つめあうような形になった。

「気持ち悪いわね、アンタたち」

絵里が僕と男子生徒をチラッとみてそう言った。その瞬間、なんとなく思い出した。

「オレだよオレ、大田彰事。ガキの頃一緒に遊んだじゃろ？」

そうだった。今、思い出した。そして久しぶりに方言をきいた。実に懐かしい。

「ショウベンショウジか」

こいつの名前は大田彰事。祖母の家の近くに住んでいて、よく一緒に遊んでいた。女の子に小便をするところを見せては嫌がられ、反応を楽しんでいたヘンタイ。

「その呼び方はやめてくれないか……」

彰事は項垂れた。

「なつこ、もういい？ あんたの知り合い来たみたいだし、もう付き合わなくてもいいよね？」

そう言って女子生徒は席をたつ。

「ちょっと待ってよなっちゃん。こいつは関係ないから。場所変えようか」

彰事は立ち上がり引き留めようとする。

「イヤ、ホントにいいから。マジでヤメテ。なつこ、罰ゲームでここに来ただけだし。それとーもう近付かないでくれる？」

なつこという女子生徒は走って店を出て行った。

店内すべてのお客さんが彰事のほうを向いている。憐みの目で見られる気分を、僕はまだ知らない。

「残念だったな。今の気持ちを教えてくれ」

彰事は椅子を動かして僕たちのテーブルについた。腕を組んで黙禱するようにじっと黙りこむ。しばらくして腕を解き、両手で膝を叩いた。

「あれだな、人がいるところでフラれると恥ずかしいだけだな。お前も気をつけろよ」

負け惜しみだろうけど、茶化すにはあまりにも不憫だった。

「はじめまして、俺は大田彰事。もしかして空の彼女？」

「違います。ただの主従関係です。これはわたしの犬」

僕を指差す絵里。確かに絵里に逆らったことはないけれど、ご主人様と呼んだことも尻尾を振ってやったことも一度もない。おかしいな。

「でも、突然帰ってくるなんて、なんかあったのか？」

彰事は真剣な顔で聞いてきた。

「いや、何かあったと言えばあったし、何もないといえば何もない」

「なんじゃそれ。それよりも、この人は？」

ずっと聞きたかったらしい。目を見開いて興味津々に僕を見る。

「絵里。苗字は忘れた。性格はなんとなくわかるよな」

コクンと頭を下げる絵里。人に頭を下げているところを初めて見た。この旅行は初めてが多いな。

「その、オマエら付き合ってるんじゃろ？」

「ない」「ない」

絵里と僕、出会って半年と少し。初めて意見が一致した瞬間だった。

「でもさ、仲良さそうじゃけえ、そう見えるで」

彰事はひとりでウンウンと頷いている。

「こうしてるとさ、ガキの頃を思い出すよな。俺たちいつも一緒だったよな。俺がバカやって、



それを空が止めて。最後はあいつが泣いて――」

言葉の続きを彰事は言わなかった。

彰事がバカをやって、それを僕が止めて、最後はあいつ――あずさ――が泣いて仲直りする。

「そうだったな。あずさは元気なのか？」

すると彰事は目を見開いた。驚いたような、それでいて哀しそうな顔をした。

「どうかしたのか？」

イテッ。

机の下で、絵里の足が僕を狙う。顔を見ると、小さく左右に顔をふった。どうやら聞いてはいけないことらしい。

僕たちはしばらく話さなかった。絵里は話さないというよりも、彰事から切りだすのを待っているようだった。当の彰事は先ほどまでと打って変わって別人のように暗い。

内容が精査できたのか、ようやく重い口が開いた。

「お前が引っ越したのっていつだっけ？」

「小学校に入る前だから、もう十年くらい前かな」

「そんなに経つんだな。」

彰事は肩を落として続ける。

「空が転校して少し経ったくらいだった。お前がいなくなって、俺とあいつはずっと一緒にいたんだ。遊ぶのも勉強するもの。あの時は男も女もなくてさ、本当にずっと一緒にだったんだ。そうやって六年生になって、夏休みに入ってすぐだった。一緒に宿題しようって、俺の家ですることになったんだ。でも、あいつは来なかった。ずっと待ってたのに、来なかったんだ」

絵里が立ち上がる。何も言わずにどこかに言ってしまった。多分トイレだろう。

絵里が完全に見えなくなってから、彰事は話を続ける。

「あいつが来なかったから、俺はふてくされてすぐに寝たんだ。次の日の朝メシ食ってる時にさ、母ちゃんが言ったんだ。あいつが死んだって」

「死んだって……あずさが？」

わかりきっていることを聞くと、彰事はそういう目で僕を見た。

とても信じられなかった。でも、信じられないくらいに僕は冷静に受け止めている部分もあった。そんな風に静観している自分が恐ろしくて、嫌いになりそうで、なんだか目が回る。

ああ、そうか。

やっぱり動揺しているのかと思うと、少しだけ心が落ち着いた。

「あまり驚かないんだな。冷たいな、空は」

「驚いてるさ。でも、ちょっと嬉しいんだ」

「嬉しいってお前、不謹慎だろ!？」

確かにこの話で嬉しいなんて言葉は不謹慎だったかもしれない。

「ごめん。嬉しいっていうのはそういうことじゃないんだ」

「じゃあ、どういうことなんだよ？」

彰事は眉を吊り上げる。

「僕と絵里がここに来た理由だよ。あずさが帰ってこいって言ったんじゃないかと思ってさ。そう考えると、なんだか嬉しくなったんだ」

突然、彰事が勢いよく立ちあがった。そのせいで椅子が後ろに倒れる。

「そんな訳ないだろ！」

彰事は出て行った女子生徒の伝票を掴む。怒りを紙にぶつけたのか、クシャクシャに握りつぶした。

背を向けてレジに向かう。会計を済ませて、店を出て行ってしまった。

またもや客の視線をいっしんに浴びてしまった。

「空が悪いわね」

帰ってきた絵里は座りながら言った。氷が溶けて嵩の増したアイ스티ーを一口飲む。

それから絵里は何も聞かなかった。こういうところは大人だなと思う。

模倣ファーストフード店を出て、まっすぐ祖母の家へ向かった。

なんだか出端を挫かれた感じがする。まだ何かを始めていないし、これから何が待っているのかわからない。だけど、帰ってきて早々に誰かが死んだなんて話は聞きたくなかった。それでもどこか浮かれている僕がいる。不謹慎なのはわかっているけど、形容できないワクワクとした感情がどこかにあった。

久しぶりに会った祖母は記憶の中の面影そのままだった。割烹着を着て、みとれるくらいに綺麗な白髪。僕の隣の絵里を見ても、嫌な顔一つしなかった。

思いのほか絵里と祖母は馬が合っているように見えた。それよりも、絵里に一般的な常識を保持していたことに驚いた。学校では挨拶ひとつしなくせいに、実践で発揮できる実力は素直に羨ましかった。

その夜、絵里は言った。

「空と彰事くんがちょっとうらやましい」

どのあたりが羨ましいのわからなかったけど、あえて聞こうとは思わなかった。

彰事とは自分でも不思議くらい自然に話せていた。過ぎて行った歳月を感じないくらいに。たぶん、絵里はそういうところをみて羨ましいなんて言ったのだと思う。

初めて絵里がどこか寂しそうな顔をした。その寂しさを拭ってやりたいと思ったけれど、本人には絶対に言うまいと決めた。だって、恥ずかしいから。

次の日も晴天に恵まれた。でも、不快な暑さではなかった。出てくる汗はサラサラとしていて心地いい。

昨日、僕と彰事が喧嘩みたいになったのに、絵里はなにも言ってこない。そんなことはもう忘れたと言わんばかりに、祖母にべったりとくっついている。まるでここは絵里の実家で、僕がお客様としているような気分だ。

朝食をすませると、なにもやることがなくなった。絵里を誘ってどこかに行こうか。どこに行けば絵里が喜ぶのか見当もつかない。そもそも喜ぶところを見たこともない。

「あの子となら、一緒にいても退屈しなさそうかな」

いつの間にか絵里が僕のそばにきていた。

「あの子って誰？」

「彰事くんと一緒にいた女の子」

模倣ファーストフード店で会った女の子を思い出してみた。

女装姿の自分と、絵里に言われた全否定の僕を思い出して少し凹んだ。

「でもさ、絵里があのタイプの子と話しをしている姿は想像できないな」

わりと無口な絵里とキャピキャピしている今時の女の子の姿を想像してみる。

すぐに関係が破綻しそうだ。

「そうですね。わたしも想像できないわ。だから一度は近づいてみたいと思うのよ。よく言うでしょ。やらないで後悔するよりも、やって後悔したほうがいいって」

ほとんど変わらない声のトーンで絵里は言った。

「そうかもしれない。でもさ、結局それって最後は後悔してるよな」

僕が指摘すると、絵里はキッと睨んで見せた。

「アンタって本当にアレね」

アレの意味がわからなかったけれど、何度聞いても絵里はそれ以上なにも言わなかった。

田舎に来た理由を考えてみた。何も浮かんでこなかった。

でも今は行きたいところがひとつだけあった。

「アイツの……友達の家に行ってもいいかな？」

「いいんじゃない。久しぶりに帰ってきたんだから」

絵里はあっさりとしたものだった。

「あたしも行くけどね」

祖母に出かけることを伝え、ふたりで家を出た。僕は手ぶら。絵里は小さなバッグを持って出た。

ひとりで行くつもりだったのに、まさか絵里がついてくるなんてまったく想像もしていなかった。

絵里に行き先は行っていない。

それにしても不安はないのだろうか。知らない土地で、知らない人の家に行く。僕なら最初からお断りだ。

歩いて三十分ほどで目的の家に着いた。

ここに来るのは十年ぶりだった。都会では考えられないほどの広い土地。大きい家。立派な装飾を施してある門が僕を躊躇わせる。

「なにしてるの、入るわよ？」

絵里はズケズケと門をくぐる。知らない人の家だというのに、勇気があるというか図々しいというか。

家を前に立ち止まっても仕方ない。絵里はもう玄関の呼び鈴を押しているようだった。

僕も覚悟を決めて門をくぐった。

中から出てきたのは、四十過ぎくらいの女性だった。

「どちらさまでしょうか？」

上品な口調。その女性のことを、僕は僅かに覚えている。間違いなく、あずさのお母さんだった。

「世良空です。お久しぶりです」

僕を見て思い出したのか、表情が少しだけ綻んだ。

「まあ、久しぶりね。何年ぶりかしら。そちらは？」

おばさんは絵里を見る。

「むこうの学校の友達の大見一一」

絵里は一步前に入る。

「はじめまして、大見です」

その瞬間、おばさんの表情に一瞬影が落ちたように暗くなった。すぐに元にもどったけれど、どこか悲しそうだった。

「暑いから中にどうぞ」

おばさんに促され、僕たちはあずさの家に上がった。

家の中には誰もいないくて、とても静かだった。窓は開けてあるにもかかわらず、どこことなくヒンヤリとしている。

居間に通されると、そこには先客がいた。座布団の上で正座している。まるで狛犬みたいだった。

「そら……」

ひとり言のように力なく彰事が呟いた。

「さあさあ、座って」

おばさんに急かされ、僕たちは机を挟んで彰事の前に座る。出された麦茶を飲む。畳続きの部屋の向こうには仏壇があった。

「珍しくお客さんが続くわね。こうしていると昔に戻ったみたいね」

「あの、線香あげてもいいですか？」

おばさんは静かに頷いた。

仏壇には僕の知っているままのあずさの写真があった。ランドセルを背負い、笑みを浮かべている。こうして仏壇を前にしても、まだ死んだという実感が湧かなかった。

これはただの写真で、家のどこかに成長したあずさに会えるような気がした。

焼香台にはまだ長い線香から煙がのぼっている。

「はい、これ」

横から絵里が線香を渡してくれた。あずさの家のものじゃないところをみると、祖母の家から持ってきたのだろう。

絵里はわかっていたのだと思う。あずさが死んだことも、僕がここに来るということも。本当、気がきくというか、憎たらしいというか。

線香を受け取り、マッチで火をつける。煙が目染みて、視界が歪んだ。少しだけ、涙がでた。

線香を立てると、先からゆらゆらと煙が立ち上る。目を閉じて両手を合わせた。目を空けると、煙が上へ不規則にのぼっていく。この煙があずさに届けばいいのにと思ったけれど、天井に達する前に見えなくなった。

その後は、おばさんが昔の話をしてくれた。楽しかった思い出ばかり話すものだから、なんだか目を背けたくなるほど残酷な話をしているような気がした。おばさんが話をして、絵里が当たり障りなく返事をする。僕はその様子を眺めて、ただただ引き攣った笑みを浮かべることしかできなかった。

「あの、あずささんのお部屋、見てもいいですか？」

おばさんはキョトンとしていたけれど、首を縦に振った。

案内されて二階の部屋の前まで来た。

ドアを開けて中に入る。カーテンが閉じられていて、中は真っ暗だった。おばさんがカーテンを開けると、綺麗に掃除された部屋が明らかになる。

「掃除だけは、ずっとしていたの」

おばさんは俯いてそう言った。

本当に埃ひとつないくらい綺麗に掃除されていた。頻繁に遊びに来ていたわけではなけれど、当時の記憶と現在とがリンクする。なかでも印象的だったのが本棚だった。天井までのびた背は、当たり前だけど僕よりも高い。その中には本がぎっしりと詰まっている。そのほとんどが漫画だった。少女漫画があれば、少年漫画もある。そこには僕が貸したままの本もあった。

「なんだか、タイムスリップしたみたいじゃな」

「そうだな」

彰事は本棚から一冊を取り出してひろげる。本の上に涙がこぼれ落ち、本を胸に抱いた。

「……ごめんな、あずさ」

「彰事くん。あの時どうしてあずさが来なかったか分かる？」

おばさんは彰事から本を受け取り、パラパラと捲る。

「あの日、娘は、あずさは地図を描いていたんです」

「地図？」

おばさんは、両手で本をかたく握りしめて続けた。

「本人から聞いたわけではありませんが、もう一度、三人で遊びたかったのではないのでしょうか。いつの日からか空くんの話をしなくなりましたが、いつもどこか寂しそうでした」

「地図って、どういうことなんですか？」

意味がわからないとでも言うように、絵里は首を傾げて聞いた。

おばさんはクスッと笑って、どこか悲しそうな顔になった。

「それは教えてくれなかったのよ。でも、描き終わるとすぐに家を出て、それから――」

そうですか、と絵里は肩を落とした様子だった。次の瞬間、なにか思いついたようにパッと顔が晴れる。

「もしかしてその地図、まだあるんじゃないですか？」

「ええ、あるにはあるけど。今さら――」

絵里は一步前に歩み寄り、おばさんの話を遮る。

「今さらじゃないです。今だから意味があるんですよ、きっと」

その時、絵里の言った言葉を思い出した。やらなくて後悔するよりも、やって後悔したほうがマシ。

本棚に本を戻したおばさんは、あずさが使うはずだった真新しい机の引き出しから黄ばんだ紙を取り出した。

「そうかもしれないわね。空くん、一緒に遊んでくれる？」

おばさんは紙を差し出す。

その不安そうな顔を見て、泣いていたあずさを思い出した。最後にあずさは泣いたのだろうか。もし泣いていたのなら、僕はその涙を拭ってやることができなかった。今さら遅いのかも知れない。過ぎて行った時間は取り戻せない。もういない人のためにできることは、本当に僅かしかない。その僅かにできることが目の前にあるのなら、やることは決まっている。

「思いっきり楽しんでくれます。みんなで」

そうして僕たちはあずさの家を後にした。おばさんは別れ際、僕たちに「ごめんね」と一言だけ言った。

彰事は力強く頷いて、上を向いて歩く。

絵里は「任せてください」と胸を張って笑う。

僕は大きく息を吸い込み「行ってきます」とどこまでも届くように叫んだ。

あずさの家を出た後、僕たちは近所の公園で輪になって地図をひろげる。

「まるで宝の地図ね」

絵里は覗き込んでいた顔を引っ込める。

地図には三か所に×マークがついていた。道が大雑把にかいてあり、そこに×マークと簡単な記号が描いてある。確かに宝の地図のようにみえた。

「これってさ、学校じゃないか？」

彰事はスタート地点から一番近い×マークを指す。その部分をよく見てみると、学校らしき絵が描いてあった。

「本当に学校？」

心底信じられないのか絵里は両の眉を近づける。

「絶対あってるって！ 空もそう思うだろ？」

「ああ……」

ほんとに学校だという自信はどこにもなかった。それでも代替案は出そうになかったから、彰事の意見に賛成した。それに、この町の小学校を見たいからでもあった。

「じゃあ、決まりな」

そうやって僕たちは小学校へ向かう。

どうしてか足が軽くなったような気がした。それは僕だけじゃなくて、彰事や絵里もどこか同じようにみえた。これから僕が知らないことが起こるかもしれないと考えるだけで胸が、心がワクワクしていた。

歩き始めてすぐ、先頭を歩いていた彰事が立ち止った。

「なあ、グリコやろうぜ！」

絵里と僕は一定のペースで歩く。すぐに彰事を追い抜いた。

すると彰事はドタバタと足音を立てて僕たちに追いついてきた。

「なんでダメなんだよ？ やろうぜ」

「いやよ。あんたひとりでやればいいじゃない？」

「どうやってひとりでやるんだよ？ 第一ジャンケンはどうするんや。それも俺ひとりでやるんか？」

歩きながら絵里は雲ひとつない青空を見上げた。

「じゃあ、なにか賭けない？ ジャンケンに勝った人が前に進めるっていうのはそのまま、負けた人は服を一枚ずつ脱いでいくっていうのはどうかしら」

「ふ、服を脱ぐんか？」

彰事は絵里の体を頭から足先までみて、顔を真っ赤にした。

僕も横目で絵里を見た。すると目が合った。不敵な笑みを浮かべている。悪女がここにいた。田舎にきて、絵里の性格が変わったように思えた。もしかすると、これが本性なのかもしれない。途端に怖くなった。

「決まりね」

ふたりは右脇を締め、若干オーバーなジャンケンのポーズをとる。遅れて僕もふたりを真似て



準備完了。

「わたしはグーを出すわ。ジャンケンー」

考える余裕を与えてもらえずジャンケンがスタートした。

彰事はパーを出した。

僕もパーを出した。

「私の勝ちね」

チョコレイトと言いながら進む。一步が一メートルくらいあった。

「ちょっと待ってよ大見さん。『チョコレイト』というのは反則ですよ。それでは六文字になる。正確には『チョコレート』だと思うんじゃないけど」

「いいじゃない、私の地元はこれであっていたの。あなたのローカルルールなんて知らないわ」  
ジャッジを仰ぐようにふたりは僕をみる。服を脱ぐのは嫌だったけれど、絵里に逆らうのは躊躇われる。

「絵里が正解ってことで」

「なんでだよ空。お前は小さい頃、俺と一緒にやったじゃろ？」

「すまん」

絵里は両手を組んで既に勝ち誇ったようにニヤニヤしていた。

「いっとくけど、私のほうが圧倒的に不利なんだからね」

しゅしゅ彰事と僕は服を一枚脱いだ。彰事はTシャツ一枚しか着ていなかったから、上半身裸になった。腹筋の割れた逞しい身体が晒される。

ちょっと、少しだけ腹が立った。

僕は半袖シャツを一枚脱ぎ、タンクトップ姿になった。

細くて筋肉のない腕が露わになる。夏前に鍛えておけばよかったと後悔した。

「じゃあ、再開ね」

もう一度ジャンケンをする。絵里と彰事は一度目と同じようにオーバーなポーズをとる。

「次はパーを出すわ」

「じゃあ、俺もパーを出そうかな」

今度は彰事が揺さぶりをかける。

絵里は口元を緩ませて彰事と対峙する。

「じゃあ、いくよ。ジャンケンー」

彰事はグーを出した。

僕はパーを出した。

そして絵里もパーを出した。

「これで二連勝ね。彰事くん惜しかったわね」

彰事は頭を抱えてしゃがみ込んだ。

どこか絵里の掌で踊らされているような気がしないでもない。

絵里は口角をあげて笑う。悪女が再来した。

「さあ、彰事くん、パーッと脱いじゃって」

「心の着を脱いでもいいかな？」

せがむように絵里を見上げる。額から流れた汗が眉を突破して目に入る。まるで涙のように見えて同情した。

「いいから脱ぎなさい」

彰事はズボンを脱がず、靴を脱いだ。靴下のままジャンケンを続行しようとした時、小学校に着いた。

校門の前で立ち止まる。手入れの放棄された植木に錆びついたフェンス。児童のいない学校の姿は、どことなく寂しそうだった。

「今から二年くらい前かな。子供がおらんけえ、隣町の学校と統合されたんよ」

靴をはき、服を着ながら学校をみる。

実際になくなったわけではないけれど、出身校が廃校になるのはやっぱりいい気はしない。

「ここで何をすればいいんじゃない？」

「それがわからないと、次に進めないよ？」

地図が示していたのは場所だけで、なんらヒントのようなものはない。八方塞がりだった。

「とりあえず、入ってみない？」

言ったそばから絵里は門をくぐり、ズケズケと校庭に向かう。あずさの家でもそうだった。なんの遠慮もなく、不法侵入という意識はないのかもしれない。

それでも他に策はなくて、僕たちは顔を見合わせて背中を追った。

「田舎の小学校って無駄に広いわね」

一通り校内をまわり、ちょうど影になっていた中庭のベンチに腰掛ける。

歩き回っても、もちろん人の姿はなかった。

もしもあずさの宝物があったとして、手掛かりがないのなら見つけようがない。

「なあ彰事。本当になにも手掛かりがないのかよ？」

彰事は腕を組んで目を瞑る。しばらくしてゆっくりと開き、首を横に振った。

太陽が少しだけ移動して、影の位置がずれる。僕たちの座っていたベンチの辺りがまぶしくなった。

誰からともなく立ち上がり、正面の花壇に移動する。花壇はレンガを積み上げて造られていて、比較的汚れていないところを選んで座る。横には大きな木があって、横に長く伸びた枝のおかげで涼しかった。

「そういえば、あの木。あの木の下にタイムカプセル埋めたんだよな。小学校を卒業する前の年の秋に」

「タイムカプセル……懐かしいわね。私も卒業する前に埋めたわ、なかには未来の自分に宛てた手紙と、大事なものを埋めたっけ」

「もう、ここには新しいタイムカプセルは埋められないんだよな」

彰事はまっすぐ前を向いて、誰に話しかけるわけでもなく呟いた。

すると突然、絵里が立ち上がった。

「ねえ、今、開けてみましょうよ」

彰事と僕は同時に絵里を見た。

他人が埋めたタイムカプセルを他人の絵里が開けようというのか。それはあまりにも無神経すぎやしないか。

「でも、どこに埋めたかはっきりと覚えてるわけじゃないけえ、見つからんかもしれん」

「見つかるかもしれないじゃない？」

絵里はもう、探すことに決めている。

「じゃけど、やっぱり俺たちだけっていうのも……」

「ウジウジしない。決めたらすぐに行動する！」

まだ決めかねている彰事に向かって、決めたらすぐになんてほんと強引だ。でも今は絵里の案以外になにもない。

何もしないより、まずやってみよう。考えるより先に、行動するのもひとつの手かもしれない。

「やってみようよ彰事」

彰事はなにも言わなかった。それを肯定ととった絵里は「ちょっと待ってて」と言い残してどこかに走って行ってしまった。

絵里のいなくなって、彰事は僕に言った。

「俺もさ、興味はあるんだよ。でもさ、なんか嫌なんだよ。うまく言えないけど、墓を掘り起こすみたいでさ」

いつの間にか彰事の顔から汗がひいていた。それが単純に日陰にいるせいだけではないことは僕にもわかった。

タイムカプセルの中にはあずさのモノが入っている。将来同窓会をして、当時の小学生たちがカプセルを空ける。でも、そこにはあずさはいなくて、モノだけがまるで遺書みたいに残る。その遺書を僕たちは無断で開けようとしている。

でも、僕はモノがみたい。それでもおばさんのことを考えると、興味だけで無責任なことではできない。

家を出る時、おばさんはなんて言っていたらうか。

『いっしょに遊んでくれる？』

おばさんはそう言った。

これはゲームだ。難しく考えることはないのかもしれない。きちんとあずさやおばさんのこと

を思い、考え、その上で行動するのなら。

僕は、最後まで遊ぼうと思う。

「お待たせ」

戻ってきた絵里の両手にはスコップが三本あった。錆びて塗装がはげ、切先は固い石にあてたのか凹んだり曲がっていたりしていた。

受け取ったスコップを手に、聳える木の下に立つ。

「どの辺りに埋めたんだ？」

「確か、この辺りだったと思うんじゃないけど」

木の根元から一メートルほど離れたところを指す。

「じゃあ、やりますか」

絵里の合図で僕たちは掘り始めた。

作業を初めて三十分ほど経った頃、絵里がなにかをみつけた。

「ねえ、これじゃない？」

「みせてくれ」

すぐに彰事が確認する。それは銀色のお菓子の缶のようだった。空気が入らないようにか袋に入れてあり、何重にもテープが張ってある。

「違うな。これじゃない」

絵里はため息をついて掘り出したお菓子の缶を元に戻していく。

「もしかしてここって彰事君たちが埋めたカプセル以外にもたくさん埋まってるんじゃないの？」

「そうかもしれないな。ここは定番みたいなところやし」

彰事は手を止めることなく答える。

見つからないかもしれない。多分、みんな一瞬でもそう思ったと思う。でも誰もそんなことは言わない。

そんな時だった。

ガリッという音がして、僕のスコップの切先になにか固いものが当たった。回りの土を丁寧にどける。楕円形の筒が出てきた。

「なあ、これはどうだ？」

掘り出したカプセルを彰事に見せる。すると、彰事の顔色が明らかに和らいだ。

「これだ、これだよ。間違いない」

それは想像していたタイムカプセルの形とは少し違っていた。想像の中のカプセルは最初に出てきたお菓子の缶のように手作りのものを想像していた。

でも、実際にでてきたのは銀色をした楕円形の筒だった。四年は経っているだろうけど、腐食した様子はまるでみられない。

僕たちはカプセルを中心にして取り囲む。

「なんだか緊張するわね」

「お前は関係ないだろ」

「確かにそうだけど、でもこういうのって夢があるじゃない。当時考えていた気持ちとかがさ、

いっぱい詰まってるわけでしょ？ ワクワクするわ。いったいどんな素っ頓狂な夢を将来の自分に求めているのかしら」

考え方が最低だった。

「じゃあ、開けるぞ？」

絵里と僕は頷いてカプセルをじっと見つめる。

ゆっくりとカプセルを捻ると、半分に割れた。そこから何通もの手紙が溢れ出してきた。彰事は一通ずつ名前を確認していく。最終的に二通を探し出し、他の手紙をカプセルに戻した。

「これだ」

「読んでみるよ」

「……ああ」

彰二は一通の手紙を開ける。三つ折りの手紙は多少黄ばんでいたけれど、読むのに支障はないようだった。

読み終わると深く息を吸い、ゆっくりと吐き出した。

「大見さんの言う通りだった」

「どういう意味なんだ？」

「素っ頓狂な夢を求めている俺がいた。将来の夢はおじいちゃんだそうだ」

一呼吸置いて、絵里と僕は堪えることなく、喉ちんこがみえるくらい笑った。

彰事は顔を真っ赤にして俯いた。

「ごめん、ごめん。笑いすぎた。本題に入ろう」

まだ頬を紅潮させたまま、彰二はもう一通の手紙を持つ。開ける手が明らかに震えていた。

できるだけ綺麗に開けようとしているのか、自分の手紙のときよりもゆっくりと開封している

。

「じゃあ、見るぞ」

彰事は何度もなんども目で字を追う。上から下まで三回くらい読み直した後、僕は手紙を受け取った。

『二十歳のわたしへ

幼稚園の先生の生活はどうか？ 子どもたちと毎日楽しく遊んでいると思います。

転校した空くんと付き合っていたらいいな、なんて考えてしまいます。

大人になった空くんと彰事くんとわたしの三人でちょっとしたゲームをしたいと思って、家で地図を描いています。でも、これはまだ内緒。

どうかどうか、ちっぽけなわたしの夢が叶いますように』

小学六年生のあずさの中に、僕がいたことが嬉しくてうれしくて堪らなかった。

あずさの思いはもう叶わない。でも、ひとつだけ僕にできることがある。それは、あずさが望んでいたことでもあったんだ。

手紙を絵里に見せる。さっと目を通し、紙を元の三つ折りにした。

「私のことが書いてないのは残念ね」

「あるわけないだろ」

「もしも私がここで育っても、私は空たちとは遊んでいなかったと思うわ」

絵里は畳んだ手紙を弄びながら言った。

「大見さんがここで育っていたら、俺と一緒に遊んでたと思う」

「ありがとう。でも、それは絶対はないわ。私が入る余地がないくらい三人はピッタリとくっついてたのよ。それに、人数は奇数がちょうどいい。二人はともかく偶数の四人になっていたら上手くいきっこないわ」

よくわからない言い分だった。けれども、考えてみると確かにそうかもしれない。学校のクラスの中にもグループがいくつかあり、たいてい三人か五人の小規模で固まっていたような気がする。

「とくかく、まだ残ってるんだから。次、行きましょう」

そう言ってカプセルを土の中に戻した。彰事と僕も掘った穴に土をいれていく。あっという間にカプセルは見えなくなった。

いつかまたここで、カプセルを開ける日が来ればいいな。その時がきても僕は関係ないのだけど、見知らぬ誰かが幼いころの思い出を懐かしむ様子を想像するだけで嬉しくなった。

体の芯に響く暑さがどこかへいき、ほんのり冷気を孕んだ風がでてきた。

太陽は斜めに傾き一日の終着駅へと向かう頃、僕たちは次の目的地に着いた。場所がわかったのは本当に偶然だった。地図からは大まかな場所の特定しかできなかった。

場所がわかったのは、これはもう絵里の手柄以外にない。

「次の目的地はそんなに遠くないところになんじゃないかな」

絵里は地図をにらむ。

「この町ってそんなに大きくないし、最初の目的地は小学校だった。小さい頃によく遊んだところとか、思い出の場所ってどこなの？」

「田舎じゃけえなんもないけど、今高野山思いつかんなあ」

「今高野山って？」

地図から目を離し、なぜか僕に聞いてきた。

今高野山といえば数百年前に建造された建物の中に仏像や屏風を納めているところだ。

絵里にこのことを伝えと、目がキラキラと輝きだした。

「間違いないわ」

そうやって僕たちは小学校から三十分ほど歩いて今高野山に来た。

この高野山には以前にも来たことがあった。あれは確か保育所の遠足だった。引率の先生の後ろを列をなして歩いた。こどもの足で保育所から一時間はかかったと思う。枝垂れ桜のカーテンを抜け、大きな池の畔に腰をおろしてお弁当を食べた。あの時もあずさと彰事、僕の三人は一緒だった。

高野山には団体の観光客なんてまったくいなかった。個人の観光客の姿も疎らで、経営がどうなっているのか不思議だった。

「遠足で来た時はここで何をしたの？」

池の畔に腰を下ろした僕たちは、何をするわけでもなくただ水面を見つめていた。

「あの時はここでお弁当を食べて、それから仏像を見たっけ。なあ、空？」

「ああ。でも途中で飽きて、僕たちはかくれんぼしてたんだよ」

静かに聞いていた絵里は「ふーん」とさも興味なさそうに相槌をうつ。

グリコみたいに彰事がまた始め出さないか心配だった。人がいないとはいえ、さすがに高校生になってかくれんぼは恥ずかしい。

「やろうぜ」

僕が心配したからなのか案の定、彰事は提案してきた。

でも、絵里は反対してくれるだろう。グリコと違って体力も必要だ。出会ってまだたった半年だけど、絵里が運動少女だとは思えなかった。

嫌ならいやとすぐに答えればいいのに、何か考えている風でもあった。

「いいわ。かくれんぼをしましょう」

予想に反し、絵里は乗り気だった。むしろ一番張り切っている。

でも、グリコのときのようにへんなオプションをつけられなくてよかった。公衆の面前で脱衣は恥ずかしい。ジャンケンに心理戦を持ち込むとは思わなかったし。

「まず、鬼を決めましょう。公平にジャンケンでいいわね」

彰事も僕もジャンケンと聞いただけで背筋が伸びた。また小賢しい手を使うのではないかと心配だ。

「ジャンケンー」

彰事は出遅れた。

僕も身体が反応しなかった。

絵里だけがパーを出した。

「後出しどころか私の不戦勝ね」

絵里とは二度とジャンケンをしないと今の自分に固く誓った。

残った僕たちがジャンケンをして見事彰事が鬼になった。

負けた彰二は目を瞑って数を数え始める。声に元気がなかった。

「どうしても見つからなかったらコレね」

走りながら絵里は携帯を取り出して頭上で振る。あっという間にどこかに消えてしまった。僕にだけ携帯のことを言ったって、彰事にはわからないだろうに。田舎に来て絵里の自己的な面が明らかになった。

「どうしても見つからなかったら電話しろ、だってさ」

「五十二、五十三ー」

「僕と絵里は番号知ってるけど、彰二のわからないのに勝手な奴だよな。とりあえず番号だけ交換しておこうぜ」

「百！ 空みっけ」

こいつもずる賢くなったもんだ。いや、前からか。小さい頃はあずさのスカート捲ってよく泣かせて逃げたっけ。それで、ぼくがあずさを慰めた思い出がある。

鬼に捕まると、用を足すために池から離れた。

トイレの場所を探していると庭内地図があった。そこで場所を確認して用を足す。その後、もう一度庭内地図まで戻った。



地図にはさきほどまでいた池が大きく描いてあった。絵の下には補足分として、短い文章が書いてある。

『水面に浮かぶ月。発光植物の織り成す奇跡』

大げさな謳い文句だった。実際に見たことはないから一概にはいえないのだけれど、観光場所ってというのは大抵大げさなものだ。

池に戻るも、そこには誰もいなかった。

あらためて池をみる。緑色の藻の塊が一面にあった。奇跡なんて起こる気配もない。

そんな時、近づいてくる人影があった。

その人は青い作業着姿をしていた。腕には今高野山管理委員という腕章がついていた。ゆっくりと近づいてくる。

謳い文句について聞いてみることにした。

「すみません」

男は両手をポケットに入れて面倒くさそうに立ち止った。

「なんですかね」

「庭内地図に書いてあった発光植物の織り成す奇跡ってなんのことですか？」

「ああ、あれね。別に大したことじゃないよ。ただ、あれだよ」

男は池を顎で指す。

「気持ち悪いよな」

「……………」

「あれって藻なんじゃけど、それが夕方から夜になる少しの間に光るってだけ。蛍光塗料の塗ってあるもんといっしょ。昔は魂が集まる場所、なんて言われていたこともあるらしいな」

一通り説明すると、手をポケットに入れたまま歩いて行ってしまった。

蛍光塗料といっしょって……。関係者のセリフではない。庭内地図の謳い文句にあった発光植物というの、厳密には自然発光ではないらしい。これは詐欺ではないのかと疑ってしまう。

それにしても、最後の一言は気になる。

魂が集まる場所。

あずさのことがあって高野山に来た。そこで魂が集まる池の話。偶然にしては出来すぎているような気がする。

彰事から電話がかかってきた。

「ダメだ。見つからない」

かくれんぼを始めてまだ三十分ほどしか経っていないけれど、いつのまにか辺りはオレンジ色に染まっていた。

そろそろかくれんぼをやめた方がいいのかもしれない。

彰事にこのことを伝え、電話を切る。

絵里に電話をかける。

「もう降参なの？」

「違う。時間がないからそろそろやめようと思って」

絵里は「しょうがないわね」と電話を切った。しばらくして女子トイレから出てくるのを見た時、鬼ではなくてよかったと心底思った。

再び池の畔に集合する。

その時だった。

「なにあれ？」

絵里は池を指差して目を見開いた。

つられて池をみると、そこには管理委員の男が言っていた光景がひろがっていた。奥に百メートル、横に百メートルはあろうかという池全体が、まるで蛍の光のように光っていた。

光る藻とは、このことだったのだ。

「ここに来たのは正解だったかもしれないわ」

ボソリとひとりごとのようにつぶやく。

彰事は口をポカンと開いたまま立ち尽くしていた。僕と同じく、初めてみたのかもしれない。

言葉では決して言い表せない美しさというのがわかった気がした。それは、形容できないから美しいのだ。

「ヤバイ」

ようやく彰事が話したかと思えば一言だけだった。でも、言いたいことはわかった。

もしかすると、これはあずさが見せてくれたものかもしれないな。そうだといいな、なんて思いながら、僕たちはとうとう日が暮れてしまうまで光る藻を見続けた。

田舎の夜は冷え込む。涼しいを通り越して、鳥肌のたつ一歩手前。

普段は驚くくらいに離れている街頭のおかげで足元もみえないのだが、今日はどうやら違ったりしい。今高野山から歩いて数分のところお祭りがある。そのおかげで道にはボンボリがいくつもぶら下がっている。

お祭りと聞いただけで心躍るのはなぜだろう。

「この神社まで続くボンボリは、神様が通るための道なんだってさ。この先の境内で神事があるんじゃないけど、そこで聞いたお願いを神様が出雲神社に持って行って願いを叶えてくれるらしいよ」

小さい頃はよく知ったかぶりをしていた彰事だけど、この話は僕もおばあちゃんから聞いたことがあった。僕がきいた話はもうひとつある。さまよう魂を神様が願いと一緒に連れていくこと。

もう、誰かが仕組んだとしか考えられなくなった。

田舎に来たそもそものきっかけは、古いテレビでみた風景のようなもの。あずさが会いに来てくれたのかもしれない。そうであればいいなと、心の底で思った。

「でも良かったわね。次の目的地が神社だなんて」

確かに高野山から離れたところだと、今日中にたどり着くことすら危うかった。

どこから現れたかと思うくらいに、神社へ続く道には人があふれていた。

「前のふたつもそうだったけど、ここで何をすればいいのかしら。せめて地図や手紙に書いておいて欲しかったわ」

絵里の言うことはもっともだった。あまりにも情報が少なくて、今まで来た道も本当に合っているのか自信がない。それでも納得できているのが不思議なのだけど。

鳥居を抜けて石段を登りきると、ひらけた境内に出た。サッカー場半分くらいのスペースの真ん中に、木で組んだ櫓がたっていた。人だかりができていないところをみると、神事っていうのはまだ始まっていないみたいだ。

「ねえ、なにか食べない？」

絵里の視線の先には境内の端に並ぶ屋台があった。

たこ焼き、焼きトウモロコシ、かき氷、フランクフルト。食べ物の屋台に挟まれて、金魚すくいやカメ釣りなんてものもあった。食品と売り場が同じなのは、衛生上いかなものだろうか。誰も気にしていないのならいいかな。

真っ先に彰事が飛び出した。

「僕たちも行こうか」

ふたりで屋台まで歩く。近づくにつれて人が多くなり、歩くのも一苦労だった。そんな時、絵里の手が僕の手に触れる。少しドキッとした。次の瞬間、もう一度手が伸びてきて、今度はしっかりと僕の手を握った。

となりを見ると顔を赤くした絵里がいた。初めて見る恥ずかしそうな表情がとても愛おしくて、手を握っていることを忘れそうになるほど見とれてしまった。

屋台でたこ焼きを買い、神社の隅でふたりで分けて食べた。なんだか手を離すタイミングがわ

からなくて、たこ焼きがなくなっても僕たちは手を繋いだままだった。

絵里の方から「いつまで繋いでるのよ」とツツこんでくると思ったけれど、予想に反して相変わらず顔を赤くしたまま黙って食べていた。

人の流れが変わる。

櫓を取り囲むように人だかりができ始めていた。そろそろ始まるのかもしれない。彰事と合流した方がよさそうだけど、辺りを見回してみても見つけられなかった。電話しようにも番号をまだ聞いていない。

下手に動かない方がいいのかもしれないけれど、座っていても仕方ないので櫓に近づくことにした。

手を繋いだまま人込みをかき分ける。だいぶ手を繋ぐということに慣れてきた頃、彰事を見つけた。人だかりの一番前に陣取り、両手両足を広げて大の字の格好をしていた。恥ずかしくないのだから……。

声をかけることに少々抵抗があった。けれども、おそらくあの恰好は三人分の位置を確保するためのものだろう。

彰事に近づくと、絵里の方から手を離れた。

「おお、遅かったな」

「彰事くんって、意外と勇気あるのね。私そういうところは好きよ。行動は嫌いだけど」

「うおおおおおおおお」

獣のような雄たけびを上げ、僕たちは周りから少しだけ物理的に距離をとられた。

僕たちとは関係なく、正面の人だかりに穴ができる。人が十分通れるほど開いたところから四人の祭司が松明を掲げて現れた。

「いよいよ始まるみたいだな」

祭司たちは櫓を取り囲む。見物客が一斉に三メートルほど後ろに下がる。僕たちも周りにあわせて下がった。

さらに白装束に身を包んだ男たちが神輿を担いで現れる。ゆっくりと神輿の扉が開き、その中から人影が見えた。その人影は外に出てくるわけではなく、開いた扉から様子を見ている。

「ねえ、あれってなんなの？」

「あれは神様だよ。今から櫓に火をつけるけえ、その煙に乗って出雲までいくんだ」

祭司たちが松明を櫓に近づける。

その時、絵里が見たこともないようなダッシュをみせた。気がついた祭司は絵里を止めようと手を伸ばす。

「これだけ、これだけお願いします」

そう言って絵里はバッグから手紙を取り出した。

祭司は駄目だと言わんばかりに首を横に振る。絵里は頭を垂れて手紙を差し出す。

時間が気になったのか、祭司は乱暴に手紙を受け取って櫓の中に手紙を入れた。それから四人の祭司たちは顔を見合わせ、同時に火を放った。

点火した火は勢いよく燃え上がり、櫓の一番上まであっという間に明るくなった。ゴウゴウと音をたてて燃える。始めは黒かった煙が徐々に灰色になって立ち上る。煙は風に乗って空を旅

する。

「この煙があずさちゃんに届くといいわね」

絵里は空を見上げながら言った。

「きっと届くさ」

彰事はおでこに手を当ててぼんやりと明るみを帯びた空を仰ぐ。

神様が本当にいるのなら、帰ってきたあずさは行ってしまうのだろう。叶うのなら、楽しかった思い出と一緒にあってほしい。

僕は止めどなく立ち上る炎と煙を見上げながら、あずさとの思い出を巡らせていた。

広島に生まれた者にとって八月六日は特別な日だ。

小さい頃は どうして夏休みの中日であるこの日に学校へ行くのかわからなかった。それでも成長するにつれてバックボーンを知ると、忘れてはいけない責任のようなものがいつのまにか生まれていた。

制服に着替えて学校へ行くと、八時十分前だった。

教室にはもう誰もいなくて、誰の机の上にもバッグが置かれている。黒板には「八時体育館集合」と大きく書いてあった。

皆にならって僕も机の上にバッグを置き、教室を出た。

体育館は生徒たちの熱気でムシムシしていた。

生徒たちは学年とクラス別に整列している。

「そこ、早く並びなさい」

教師に急かされて自分のクラスを探す。一番前の列に、見知った顔ぶれがあった。

「田舎はどうだった？」

列に加わると、横から拓也が汗を拭いながら話しかけてきた。相変わらずシャツはだらしなく出ていた。

「なんか、スッキリした」

校長先生が壇上に立つ。徐々に生徒の話声が消失していく。

先生が話し始める。その途中、八時十五分になると、僕たちは背筋を伸ばして目を閉じた。

一分後、再び目を開けてから三十分の間、校長先生の話が続いた。三人の生徒が倒れて保健室に運ばれ、二人の生徒が気分不良を訴えて集会を離脱した。

教室に戻ると簡単なホームルームがあり、解散になった。

絵里と拓也、僕の三人は家路につく。

拓也とは夏休み前と同じように途中で別れた。

ふたりで歩いていると、なんだか田舎のことを思い出した。夕方、あずさとふたりで帰っていた。ちょうど雨上がりで、道路と靴はぐっしょりと濡れていた。夕日は驚くほどに眩しくて、濡れたアスファルトはびっくりするくらいにキラキラ光っていた。ずっとこの光景を見ていたくて、あずさとふたりでゆっくりと歩いた。

その時、絵里の手が伸びてきて、僕の左手と繋がった。

「そういえば映画観てないわね」

「また行けばいいさ。夏休みは前よりもちょっとだけ短くなったけど、代わりに秋休みができたしね」

絵里の手を少しでもきつく握る。

「生きるの最後のシーン知ってる？」

映画の話だろうか、見ていないので最後まで知らない。

「見に行こう。その時はさ、彰事も誘ってさ」

「拓也くんはどうするの？」

そういえば拓也のことを忘れていた。

「どうせ来ないだろう。それよりも、あの時、燃やした手紙って何だったの？」

空いた手で口元を覆い、クスッと笑って僕を見た。

「ないしょ」

それから僕たちはゆっくりと歩いた。道路は一本にまっすぐ伸びていて、暑さのせいかな誰もいなかった。

小さい頃よくやった遊びを思い出した。

「白線ゲームしないか？」

絵里は首を傾げる。

「白線の上を歩いて、落ちたら負け。ルールは簡単だろ？」

口元を覆っていた手が顎に移動する。

しばらくすると、ぱっと目を見開いた。

「でもここじゃ一本道だから簡単すぎるわね。ルールを変えましょう。大喜利みたいに交互にお題を出すの。答えられなかつた方が負けね」

そう言って絵里は手を離し、白線の上に立った。

なんだか少しだけ手が寂しくなって、立ち止ってしまった。

「空が勝ったら、今度は空から握ってよね」

風に靡く髪を手でおさえる。

これから起こるであろう、いろいろな逆風の前に立ちたいと、強く思った。

遅れて白線の上に立つ。思いのほか線が細くて足元がグラついた。

「わたしからいくわよ」

考えるように空を仰いだ。

なんだか、田舎での出来事が夢だったように感じる。まるで絵空事みたいだった。小学生のころにしたオリエンテーリングみたいだった。ゴールにたどり着いた先には、また新しい道がひろがっている。

絵里は何か思いついたように微笑む。

今度はどんな難題がまっているのだろうか。考えるだけでゾクゾクする。

唇が小さく動き、声を発する。

太陽はギラギラと僕たちを照らし、ジリジリと肌をやく。蝉が鳴き、生ぬるい風がこの町に停滞する。絵里の額から汗が一筋流れる。

僕は答えを胸に、絵里に一步近づいた。

(了)